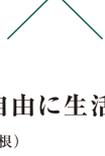


忘れる、できなくなるのはダメなことではなく、人間が人生をまっとうしているプロセスのひとつ



阿久根 賢一



桂 春團治 師匠



認知症になった方が、いかに自由に生活ができるかを追求して、一冊の本にまとめました。(阿久根)

阿久根 春團治師匠には豊泉家グループで、娯楽やエンターテインメントを統括しているCEO（チーフエンターテインメントオフィサー）を務めてもらっています。豊泉家グループで高齢者の方々に笑いを届けたり、お弟子さんを派遣していたいたり、豊泉家の笑いの部分をプロデュースしていただけでいます。今日は師匠には認知症ケアの観点とともに、「豊泉家×笑い」を主なテーマとした視点からお話を伺い出来ればと思っていますので、よろしくお願ひします。

春團治 こちらこそ、よろしくお願ひします。

阿久根 私ども豊泉家グループでは、R&D<研究・開発>発表会を行なっていて、今年で16回目となりました。私はその第1回から、認知症ケアについての研究をしました。それを一冊の本にまとめたのが、「認知症イノベーション 一人ひとりの「パラダイス」を創造するケアメソッド」です。豊泉家をご利用いただいている方は、皆さん楽しんでそうだと仰っていただいています。そのために我々がどうしているか、認知症の方のケアに対する考え方をまとめたものなんです。

春團治 ほう、そうなんですか。興味深いですね。

阿久根 私は2003年から、認知症をテーマに研究を続けてきました。今回、書籍にまとめようと思った理由は、認知症に関する本は世の中に、すごく沢山あるんです。それなのに、実際に応じた入居者の支援であったり、変化などに言及したものが少ない。そこで現場実践を通じて研究し、そこに行き着いたんです。そのことを、世の中に伝えていきたい。認知症になれば今までできてきたものが失われたり、それまでの自分たちのライフスタイルが変じらなったりして、高齢者の5人に1人が認知症になると言われており、いつ、誰がなくてもおかしくなりません。なので、そうなった時にいかに幸せな環境を創るのか、いかに自由に生活ができるかを追求して、一冊の本にまとめました。

春團治 僕にとって認知症は身近な話題で、自分の年齢からもそうですし、それに以前テレビ番組で、壺家さんは認知症になりたくてやっていたのを観ました。これは失礼ですが、普通の番組でその先生が、学校先生は認知症になる確率が高いと言っていたんです。それはなんでかというところ、学校の先生がされる講義の内容は毎年決まっている。そやけど壺家はお客様が毎日、替わる。その都度、お客様の反応が気になって、ボケてられへん。だから、壺家は認知症になりにくいというのには、ちょっと違っていましたな。大変なご恩をいただき、人間国宝にもなられた桂米朝師匠が、晩年は認知症になっておられましたから。

阿久根 そうだったのですか。

春團治 最近は、ときどき線はんに「ボケたん違う?」って、からかわれるんです(笑)。自分でたまに「オレ、ホンマにボケてるのか?」となることもありますけど、でも「違う、これは元来のオレのクセや」と思っちゃたりするんですけどね。でも不安であることは、確かです。いつ、豊泉家の皆さんのお世話にならないといけないか、わからないで、わからなくていいかな。そういう意味では、残念で悔しいんですけど、不安が付きまとうことは事実ですね。

阿久根 今回出版します「認知症イノベーション 一人ひとりの「パラダイス」を創造するケアメソッド」は、豊泉家として新しい認知症ケアの考え方を世に出していく本になっています。この本の一冊のポイントは、自分たちが信じてやってきたケアが、実は受け止めていた。それを止めることから、始まっています。そうするのは、専門職として相応な勇気が必要なことでした。でも、これは真面目で純粋だからこそ、出来たのではないかと感じています。自分たちのケアと、入居者の笑顔とがマッチしていない。そう感じたことをきっかけに、自分たちを疑ったんです。

春團治 なるほど、それは素晴らしいですね。

阿久根 入居者の方に課題があるのではなく、自分たちのケアに問題がある。そう思ったことが起点なんです。私ども豊泉家ではケアワーカーのことを、フォローと呼称しています。手前味噌ですが純粋な人間が多いんです。そういう意味では豊泉家のフェローだからこそ、自分たちを疑うことを出発点に出来たのかもしれない。

健康のために歩き、歩きながら囁の稽古をしています。(春團治師匠)

阿久根 師匠はご自身の健康に関して、普段からどんなことに気を付けておられるのですか。

春團治 僕が日々気をつけていることは、歩くこと。タクシーの料金を節約するために、歩くんです(笑)。タクシーに乗ったとしても、降りる時は料金メーターが上がりそうになったら、目的地ののりか、ふたつ手前の信号で止めてもらって、そこから歩くとか。そういうことを、心掛けているんです。

阿久根 タクシー代の節約より、もちろん、健康のためです(笑)。師匠は万歩計を付けておられますが、1日何歩くらい歩かれるのですか。

春團治 最低5000歩は、歩くようにしています。たとえば今日は3000歩歩いたら、明日は7000歩は歩く。ただし、1日に5000歩以上歩いたらしても、越えたら次は次の日に控えています。そう心掛けて歩いてると、それから桜塚でお世話になっていますけど……。

阿久根 プリベンティブスタジオ、通称プリスタですね。豊中市桜塚の豊泉家新子防センター2階に、アクティブシニアのための、予防をテーマとした参加型エンターテインメントスタジオ「プリベンティブスタジオ豊泉家 桜塚」がありまして、師匠にもこちらで行なっている健康プログラムにご参加いただいています。

春團治 そんなに極端に効果があったわけやないですけど、少しずつ効果が出てくる。長年、月に2回調整を頼んでいる先生がおられるんですが、その方が「最近、筋肉が変わってきましたね。」とか、褒めてくれるんです。歩くこと以外にやっているのはプリスタしかないで、その効果であろう。そんなに大きく数字には出まなくても、それは嬉しいことと思っています。

阿久根 歩行も単に歩くだけじゃなくて、意識的に歩くことが大事なんですか。

春團治 そういことですか。

阿久根 また、なにかとあわせて歩行することが良いんです。今回の「認知症イノベーション 一人ひとりの「パラダイス」を創造するケアメソッド」にも書きましたが、ハーバード大学のジョン・レイティ博士という方がおられまして、日本にいられた際に私もお会いしました。レイティ博士曰くは、運動するのは脳にすごく刺激を与える。それとあわせて歩いているのは、屋内ではなく屋外で運動するのが良いと。なんにもないところでウォーキングするよりも、外を歩いて景色が変わっていくのは、良い効果があると仰っていました。

春團治 なるほどね。僕もプリスタに行く時は、ちょっと距離がありますが、阪急電車の岡野の駅から歩くんですよ。なぜかという、岡野というところは僕にとっても懐かしいところ、小中高このあたりの学校に通っていた、商店街も馴染みがあるんですよ。歩いてくると、歩くようになってきます。馴染みのある道や、思い出るところを歩いたりするのは楽しいんですよ。それと僕らは、歩きながら昔話の稽古をするんですよ。これは仲間内でも言いますが、歩くというリズムを伴います。歩きながら稽古すると、自分の歩が上手になったような気にならなると。

阿久根 なるほど、歩調に合わせて、囁も入ってくるんですね。

春團治 そういことですか。囁にリズムがつけられるということですか。これはなんにも考えなくて歩いてる方々と比べたら、得なところだと思います。

阿久根 そうですね。我々は歩きながら囁の練習をすることは、ありませんからね。

春團治 僕らの世代になると、耳にイヤホンかなんかを付けてというわけにもいかないと思います。これは我々、壺家の特典でしょう。

阿久根 落語が常に頭のなかにあって、どこでも囁のトレーニングをされるのですか。

春團治 そい言うやうにエツツと囁の稽古家なんです(笑)、歩く時にはいいですね。我々は「ネタを練る」と言うんですけど。

今を否定するのではなく、認知症の方が昔話をされたら、ぜひとも共鳴していただきたい。(春團治師匠)

阿久根 先日1日に5000歩ほど歩かれるという話がありましたが、実はこの本の中からも、歩くことについて紹介している部分があります。認知症をお持ちの方が、ホーム内を1日に4万歩も歩かれたんです。

春團治 それは、スゴすぎますね。ゴルフをしても、せいぜい2万歩足らずでしょう。それを考えると、ホンマにスゴいです。

阿久根 ゴルフだと平日くらいの時間ですけど、本でご紹介させていただいた方は1日中歩かれますから。だけど認知症による徘徊は、一般的な老人ホームや病院では問題行動とされるんです。

春團治 ほう、その扱いになるんですか。

阿久根 でも私たちはお顔を見て、楽しそうに徘徊していたら、それは問題行動と捉えないんですよ。

春團治 そうい風に対応してもらえたら、ご本人も嬉しいでしょうね。

阿久根 問題行動とされたら、止められてしまいます。けれど止められた側としては、楽しく歩いていたのに止められた。それがストレスになって、認知症がひどくなるんです。豊泉家のメソッドでは、徘徊しても顔を見て楽しそうだったら止めない。逆に1万歩歩ける様に食事量を増やしたり、栄養価を高くする等、歩くための支援を行なっています。

春團治 なによりもの心遣いですね。「ボケたんかい」などと、とにかく否定せんといほしいですね。

阿久根 この本の中からは、「否定をしない」もキーワードの1つになっています。認知症をお持ちの方に対しては、いかに否定しないかは大事なポイントなんです。

春團治 歩き回っている人などの面倒を、どう見てあげるかということですね。また米朝師匠の話になりますけど、ある時、「師匠、ありがとうございます」と言ったり、「誰か、ご馳走したんや?」と仰ったりします。これは懐かしいというか、ずいぶんと無礼な心得で行くなら、そんな壺家は豊泉家に何をしていただく資格はない。どんなお客様にも、たとえ少しでも、喜んでいただきたいと思う。それが、芸人の心得。そのことは、常に指導しています。

阿久根 認知症を有する方でも、笑っている姿はやばり印象的なんです。そういう姿を見ると、笑いは本能というか、その人らしさのかなと思います。

春團治 ホームのフェローの皆さんからは、「反応はわからないかもしれませんが、とても喜んで、楽しんでおられます。」とお聞きしています。反応は微かだったとしても、喜んでいただくため、一生懸命に芸を披露するのが我々、壺家の本分です。

阿久根 どういう反応が返ってくるかわからない方々の前で、お話をさせていただくのは、壺家さんにとって高度なトレーニングにもなりそうですね。

春團治 トレーニングですし、お年寄りにとっても……、これはおかしいな。オマエも、お年寄りやないかいつて(笑)。楽しんでいただいた方が、少しでも喜んでおられるのでしたら、それはなによりです。

阿久根 壺家さんにとっても、ご入居者にとっても、いい関係なんですか。

春團治 それと我々年寄りに、豊泉家の皆さんから言っているのは、「ボケることを、怖がらないでいい」ということ。周りに迷惑をかけるけど、本人はそれを知らないわけですから。本人にとっては、幸せな状態かもしれない。ボケないための様々な努力をするべきやけど、ボケること自体はそんなに怖がることはないです。そういう言葉で、ご本人やご家族など、認知症に悩む方々を慰めていただくことも、いいと思います。

阿久根 ある意味、忘れるのは人生において、素晴らしいことかもしれません。怖がる必要はなくて、むしろおかしなことをして、頭がいかなくなるでしようという。忘れゆく記憶は、記憶がなくなっていくと、それが怖い。語り知れないものがあるという。僕が我々となるでしようといった方々をしっかりサポートしていきたいながら、認知症であっても心豊かに暮らせる環境を届けたいと思っています。

お客様に喜んでいただくことが第一。それは壺家もフェローの方も同じです。(春團治師匠)

阿久根 認知症は不思議なことに、新しい記憶が失われていくんです。自分の年齢は忘れても、生まれた年は忘れないとか。女性の方は結婚して名前が変わっても、旧姓は覚えていられることもあります。新しい記憶から失って、古い記憶が残ることが一般的ですね。

春團治 お世話をする人も、喜びを感じておられると思うんです。たとえば、晩年の米朝師匠は壺家の名前も、自分の息子さんや新しう襲名された名前もはつきり覚えていないから、ずいぶんと無礼な心得で行くなら、そんな壺家は豊泉家に何をしていただく資格はない。どんなお客様にも、たとえ少しでも、喜んでいただきたいと思う。それが、芸人の心得。そのことは、常に指導しています。

阿久根 本当に、そうです。私ども豊泉家のフェローたちは、時には俳優業みたいなこと言われるんです。それは昭和にならなくて、認知症の方のなかや、昭和30年代理の生きている方々の方々のことです。たとえば今日は豊泉家の2020年の8月と云ってくださる。それは昭和50年生きておられる方が、昭和30年代に戻っておられる方もいます。

春團治 そうなんですか。

阿久根 ある程度のヒントを与えて、今日は2020年だったと思いで出してくれたいんではないですけど、思い出せない方には、私たちがその方の世界に入っていくという方がいいんです。認知症になったある方の世界では、お父さんは今でも現役当時の飲食業のオーナーなんです。その方にとって私たちはフェローは、ひとりでは自分が可愛がっている部下で、もうひとりにはデキの悪い部下。さらにもうひとり、お得意さんに見えてるんですよ。それぞれに対して話しかけようなんです。我々はそれを見極めて、自分が部下であれば、部下を演じながらケアをしていく。今は現場で、こんなことをやっているんです。

春團治 それは、誠にありがとうございます。ケアワーカー、豊泉家ではフェローとされる方々のお仕事は、大変なことやと思います。僕は介護士になりたいと思われた時点で、敬意を表します。自分らの親や兄弟の面倒を見るのも大変なのに、お仕事をされると、他人のお世話をされる。敬意を表します。

阿久根 やばり、嫌々では出来ません。好きだからこそ、楽しんでるんですよ。とはいえ、認知症に合ったケアをするには、真面目に受け止めてもらわないとダメなんです。上手い肩の力を抜くながら、目の前で起きていることを、どう受け止めていくか。熱心にケアをされているご家族もいらっしゃるんですけど、力を入れて下さるとお世話する側も、される側も疲れるんですよ。いかに目の前であることを受け止めて、そこから状況をどう展開していくか。そうするとお互いが楽に、気持ちよく生活ができるんですよ。

春團治 それは、我々も心の中で同じなんです。つまり、お客様や壺家の表情が我々、壺家のフェローのお方も、相手の反応が気になるといいます。いくらかは名人や、上手いと言っても、僕も心で同じなんです。お互い点で、共通項やと思います。壺家もフェローの方も、相手の反応が気になるといいます。

阿久根 仰る通りです。私たちは相手の世界観に合わせてケアをするのですが、まさに師匠が仰ったように相手の反応や表情、目を見ながら、これは喜んでくれる。これは嫌がっている。ただどう見ても、僕らは壺家のことを、どう受け止めていくか。熱心にケアをされているご家族もいらっしゃるんですけど、力を入れて下さるとお世話する側も、される側も疲れるんですよ。いかに目の前であることを受け止めて、そこから状況をどう展開していくか。そうするとお互いが楽に、気持ちよく生活ができるんですよ。

春團治 これは話を合わせるようですが、僕は落語は情やと思っているんです。人情の情ね。そこには互いに、共通項がありますよ。僕らの世界には、「芸は人なり」という言葉があります。ウチの師匠もかねかね、「落語は人間性や。」と言っていました。東京の先人、大変お偉い壺家の方も「丁度悪いヤツは、壺家になってはいけない。そんなのが落語をやるよ、芸も汚い。」と言っていました。こんなことを改めて言うのは恥ずかしいことかもしれないんですけど、やっぱり芸事も仕事にも、真心を込めるのが大事やと思います。

阿久根 まさに師匠が仰るように、私たちはサービスの質は、フェローの質だと思っています。いくらかライセンスがあっても、そこに心がなければ、絶対に良いと思えない。心のあふれた人間がトレーニングをしていってこそ、良いケアが出来るんです。偉大な師匠に向かって失礼ですが、本当に我々と通じるものがあると思います。

春團治 ホンマですね。今初めて、気が付きました。共通項は、真心ですね。

阿久根 そうですね。でもプロって、そこなのかもしれません。

春團治 それが大変だからとって敬わされるのではなく、僕らで言えば落語に対しては、真心を込めて囁をする姿勢を崩さない。それを今さらながら、自分に言い聞かせています。

阿久根 やばり、壺家も落語が好きじゃないとダメです。それを通じて相手に喜ばせようという思いですね。介護も、介護が好きで、認知症を持たれている方を大事に思わないとダメなんです。落語と同じで相手に幸せにしたいということに、相通するものがあるんだと思います。

忘れる、できなくなるのはダメなことではなく、人間が人生をまっとうしているプロセスのひとつ。(阿久根)

春團治 今のお話のなかで僕が嬉しく思ったのは、徘徊する人に対して妙な指導をしたり、否定をしないということ。歩いてる人を否定しないのは、誠に結構なことです。

阿久根 眉間にシワを寄せて険しい顔で歩いていた、明らかに身体や生命に支障があるようであれば、止める様にしています。

春團治 もちろん、もちろん。

阿久根 しかし、ニコニコして歩いておられたら、どうやら歩き続けてもらえるかを支援することも、認知症ケアの重要なポイントだと思うんです。でも専門職は、徘徊行動は問題だから止めないといけない。そういうところから、入って入ります。

春團治 あー、なるほど。

阿久根 ご自身には意味があつて歩いてるのに、止められたら否定の連続になる。それが、ストレスになってしまうんですよ。

春團治 歩いてるのを止めようとする人は、相手方の気持ちには立っていない。ただ自分の心でそうしているから、止めたりするんですよ。己の形が大事で、己の気持ちで動いている。

阿久根 そうなんです。悪意があつて止めないならまだしも、止めている側の介護士たちは、良かれと思って止めている。徘徊は止めなくてはいけない。これは苦痛だと思いで止めてしまう。実はそうではない人も多くいる。そういうことを、この本のなかで表したつもりです。

春團治 それは、誠に結構なことですか。とにかく、世話をする側の人の我がはいいじゃない。

阿久根 ケアは、相手が返って成り立っていくんです。

春團治 そうですね。織り返しになりますが我々、壺家もお客様があつてこそ。お客様が笑ってくれるのが、大事なことです。

阿久根 我々も、お客様の笑顔があるから、ケアが成立します。まさにそれは、壺家さんとも共通すると思います。師匠は今後も、高齢者の方へ笑いを届けたらいいと思います。

春團治 もちろん、もちろん。僕は直接、介護ができるわけではありません。中途半端に参加したら、やこしいだけやと思うんですよ。僕はお年寄りの方に笑いを届ける時、同時に、今後もフェローの方々とお付き合いをして、途半端に参加したところを見出せたらいいなと思っています。

阿久根 今日は師匠から「否定しない」、「ボケるのは怖いことではない」といった重要なキーワードをいただきました。

春團治 そういったことを豊泉家の皆さんから、我々年寄りに言い聞かせてほしいね。

阿久根 ボケるの怖いことではありませんし、忘れる、出来なくなるのは、決してダメなことではなく、人間が人生をまっとうしているプロセスのひとつ。そういう捉え方もできます。すべてを肯定することから、始めていこうじゃないかと感じます。

春團治 言葉では簡単に言えますけど、人様の世話をすること、は大変だと思います。口にした言葉になるかもしれませんが、フェローの方々は自分自身のことにと誇りを持って、生き甲斐として取り組んでもらいたい、勝手ながら願います。

阿久根 一生懸命にケアをする人も、苦しんでいる介護スタッフの方、在宅で介護されているご家族の方々がいらっしゃる。そういう認知症の方をサポーターとしていこう。その本を通じて「介護士やなくて、いいんだ。ちょっとでないといけないんでしょ。チャラチャラした人間には、務まる仕事ではないでしょうから。地道な努力をされている方しか、出来ない仕事でしよ。逆に言えば、そこが私の苦勞すところやろ」といって、(苦笑)。いって、皆さん陰気なわけではないんです。汚れを知らないとか、消い人たちがばっかりやから。そういう人たちにとって、冗談は必要やないんでしよ(笑)。

阿久根 師匠、心のなかでは、ちゃんと笑っていますよ(笑)。

春團治 僕の話をしっかりと聞いてくれているのは、わかっています(笑)。他のことを考えていたり、居眠りするとか。そんなことはないですからね。

阿久根 そういう意味では手前味噌ですが、私どものフェローは、純粋な人間が多いのかもしれない。

春團治 そうでしよ。それと云えるのは、笑いやちううのはやばり、ドロドロした世界こそ必要。それは古今東西に共通して、言えることかもしれないです。笑いの形のひとつとして、体罰や権力に方向かって、それを笑いに転じさせようという方があります。

阿久根 風刺的な笑いや、笑いの形です(笑)。

春團治 僕とは豊泉家のフェローの皆さんに、それは必要でないんですよ。僕は壺家さんに異質なものも絡れ込んでいると、自分で思っています(笑)。僕はそのフェローさんの雰囲気はいいじゃないで、皆さんと接するとは大変嬉しいことなんです。

